

## 道徳と普遍的価値

溝浦健児

### はじめに

昨今、道徳心の欠如が叫ばれており、様々な社会問題を引き起こしている。社会のありとあらゆる場所、学校教育の現場から立法府の議場へと至るまで、目を覆いたくなるような惨状が広がっている。

そもそも道徳とは何であろうか。世間や社会における、個々人が守るべき規範であり、倫理や修身という言葉で語られることもある。

上記は必ずしも明文化された法律などではなく、歴史や伝統によって培われた、不文律である場合も多い。

道徳には必ず価値判断、より正確に述べるなら、善悪や正邪、美醜などの判断が伴うが、価値判断が伴う以上、必ず意見や理念の対立が起こるのであることは、想像に難くない。

ある共同体や集団では是とされる事が、別の共同体や集団では否とされる事例は、枚挙にいとまがないであろうし、国家、民族、宗教、社会階層などによる違いももちろんあるだろう。

しかし筆者はあえて、時代や地域を超えた、普遍的な共通善は必ず存在するという立場をとりたい。

### 1. 経済と道徳

かつて、近江商人は、「三方よし」という経営理念を掲げて経済活動に勤しんでいたが、「売り手よし 買い手よし 世間よし」<sup>1</sup>というこの言葉は、残念ながら死語同然なのかもしれない。

マルクス主義が標榜する、資本家と労働者の本質的な対立、すなわち階級闘争などには微塵の興味もないとはいえ、世界規模で拡大し続けている

---

<sup>1</sup> サンライズ出版編（2003年）『近江商人に学ぶ』サンライズ出版、38頁。

経済格差には、問題意識を持たざるを得ない。

先進国、新興国、途上国を問わない貧富の差拡大には、実体経済と金融経済の深刻な乖離や、物理資本及び自然資本による制約を受けない、無形資産経済の際限なき増大など、複合的な要因があるため、ここではこれ以上、深く立ち入らないが、貧富の差が固定化されつつある現状は、看過できない。

少々、世俗的な物言いになってしまうが、「親ガチャ」というキーワードが物議を醸した事がある。これは、まるで遺伝かのごとく、親の経済力がそのまま子どもの教育機会における優劣と、それに起因する所得格差を増大させ、やがては社会階層として固定化されていく実態を表現している。

「教育社会学者の舞田敏彦氏の調査によれば、東大生の親の世帯年収は 54.8 パーセントが年収 950 万円以上である一方、その親と同世代の世帯年収で年収 950 万円以上は 22.0 パーセントにすぎないことが判明しています (2014 年度)。この差は、学費の高いアメリカの私立大学ではいっそう顕著になります。ハーバード大学の学生の親の世帯年収は、52 パーセントが年収 12.5 万ドル (約 1,300 万円) 以上となっています。つまり、経済格差がそのまま教育格差につながり、本来は東大に入学できるような優秀な頭脳を持っていても、十分な教育を受けられる環境になかったために、あるいは大学進学という選択肢が視野にあまり入らなかったために、埋もれている子どもを作っている可能性があるのです。」<sup>2</sup>。

上記に起因する経済格差は、もはや階級とさえ言い換える事も可能であるが、我が国に顕著な問題として、正規雇用と非正規雇用の大きな待遇格差が存在し、後者が雇用の調整弁として搾取されている現実がある。

これらが相まって、ワーキングプアの成れの果てとでも言うべきネットカフェ難民や、奨学金返済のために性風俗産業に従事せざるを得ない女子

---

<sup>2</sup> 東大生の親「年収 950 万円以上が半数超」経済格差の不条理 <https://gentosha-go.com/articles/-/25380> (最終確認 2023 年 1 月 23 日)

大学生など、多くの生活困窮者を生み出している。

彼等彼女らの窮状を、自己責任の一言で片付けるのは容易であるが、ビジネススキルや IT リテラシーの向上など、労働者自身で取り組むべき、自助努力の機会さえ与えられなかった現状を鑑みれば、然るべき労働の対価が支払われない構造を、社会が一丸となって是正していく必要がある。

社会学の文脈で述べられる、労働力の再生産コスト、すなわち、労働者は、生活の基盤たる衣食住を賄い、心身の健康を維持する余暇を楽しみ、次世代の担い手となる子どもを産み、育てるために必要十分な賃金が保証されなければならないという考え方は、イデオロギーなどではなく、必ず実現されるべき基本原則である。

経済と道徳における、本質的かつ根源的な問題は、カネ儲けのためなら、人々の心身の健康や地球環境などは害しても構わない、というような拝金主義にあるが、とりわけ、並の国家を凌ぐ力を持つ、欧米のビックテックや農業メジャーなどを筆頭とした、多国籍企業群の姿勢である。

人の身体は食べた物でできている。と言っても過言ではないように、食料と農業は、人の生命に直接関わっているが、とどまるところを知らない拝金主義が、多くの人々に不幸と苦しみを招いた事例がある。

「2007年から08年にかけて起きた世界食料価格危機。穀物価格が暴騰し、わずか2年で飢餓人口を1億人増やした。まさに悪夢のような世界食料史的一幕だ。マスコミのヘッドラインには、〈干ばつ〉〈政情不安〉〈中産階級の増大〉〈肉食人口の急増〉などの文字が次々に流れていたが、実はあの年のFAO（国連食糧農業機関）のデータでは、世界の穀物生産量は史上最高値を記録していた。実は穀物価格を高騰させた真犯人は、バイオ燃料の需要と投機マネーの流入だった。途上国で億単位の人々が食べ物を手に入れられず死んでゆく一方で、一握りの投資家たちが巨額の利益を手にしていったのだ。WTO（世界貿易機関）体制を中心に、グローバル企業による農業ビジネスが支配する今の食システムを見ると、飢餓を引き起こす真の原因は、食料不足では決し

てない。」<sup>3</sup>。

冒頭で述べた近江商人の精神は、我々が目指すべき指針を与えてくれる。

## 2. 政治と道徳

イギリスの元首相、ウィントン・チャーチルは以下の言葉を残している。「民主主義は最悪の政治形態といわれてきた。他に試みられたあらゆる形態を除けば」<sup>4</sup>

1947年、英国議会下院で行われた本演説は、「The Worst Form of Government」<sup>5</sup>として知られるが、民主主義の優位性とその危うさを、チャーチルらしい皮肉を交えて風刺しているのが印象的である。

フランスの政治思想家であったアレクシ・ド・トクヴィルを筆頭とした、多くの識者達が、寡頭政治と表裏一体であり、衆愚政治へと転落する危険性を常にはらむ、民主政治の危うさに警鐘を鳴らしてきたが、人類は、未だこれに取って替わる有力な政治制度を見出せていない。

専制君主が暴虐の限りを尽くし、筆舌に尽くし難い、数多くの悲劇を繰り返してきた恐怖政治の反省から、議会制民主主義が誕生したが、残念なことに、大衆の野蛮な本性を取り除く、特効薬には成り得ていない。

それ故に、哲人政治を提唱した古代ギリシアの哲学者プラトンは、優れた人徳と慧眼を持つ、賢人君主による独裁を必ずしも否定していなかった。

彼の試みは、結果として実を結ぶ事はなかったが、無私無欲の卓越した指導者が国家を牽引する有用性は、成長期や変革期、さらには外敵侵入などからの防衛において、その効力を最大限発揮した。

専制主義であれ民主主義であれ、為政者として国家運営を担う者達の責

---

<sup>3</sup> 堤未果（2022年）『ルポ 食が壊れる 私たちは何を食べさせられるのか?』文春新書、94頁。

<sup>4</sup> 名ぜりふ劇場 チャーチルの名言  
<https://mainichi.jp/maisho/articles/20201221/kei/00s/00s/011000c>  
(最終確認 2023年1月24日)。

<sup>5</sup> *International Churchill Society The Worst Form of Government*  
<https://winstonchurchill.org/resources/quotes/the-worst-form-of-government/>  
(最終確認 2023年1月24日)。

任は、極めて重大であり、歴史の評価を含めて、批評を免れぬものである。

その責任の重さ故、為政者たる者には価値判断、すなわち、善悪、正邪、美醜などに対する、自身の理念と哲学が要求されるのである。

上記は、政治道徳という言葉でも表現できるが、我々がそれを実感できる機会は、ほぼ皆無であるのが現実であろう。

では、具体的かつ現実的な文脈において、政治家が体現すべき政治道徳とは何か。

「政治における最高道徳とは、畢竟、<sup>ひつきょう</sup>「国民の経済生活を保障することである」これに尽きる。これはマキャヴェッリや韓非子の説であるだけではなく、<sup>こうし</sup>孔子や<sup>もうし</sup>孟子の説でもある。と断言すれば、あっと驚く人も居るかもしれない。しかし、これ、<sup>まぎ</sup>紛れもなく本当の話である。納得出来るように、後で詳しく論ずるから差し当たって<sup>こゝ</sup>此处では、結論として受け入れておいて戴きたい。「経済」とは「<sup>けいせいさいみん</sup>経世済民」の略である。「経世済民」とは、世を<sup>おさ</sup>経め、民を<sup>すく</sup>済うこと。有効な政策によって政治を行い民の生活を保障する、このことであつた。<sup>かんげん</sup>換言すれば、儒教的考え方においては、<sup>いわゆる</sup>所謂「政治」と所謂「経済」とは、<sup>ほん</sup>殆ど同義語であつた。

欧米においても、ケインズ以来、政策の中でも一番重要なのは経済政策となっている。ソ連も、結局、経済政策に失敗して滅亡したではないか。

その結果、イデオロギーとしてのマルクシズムも消滅してしまったではないか。真に、下部構造は、上部構造を規定する。資本主義国においても、社会主義国においても、経済悪ければ全て悪し。逆に、経済良ければ全て良し。此处まで言いきってしまうことについては異論もあろう。しかし、この言、<sup>いふ</sup>当たらずと<sup>いふ</sup>雖も遠からず。此处までなら、言えるのではなからうか。結局、<sup>いふ</sup>最高の政治道徳とは、国民の<sup>けいせい</sup>経済生活を保障することである。良い経済政策を成功させることである。で

あれば、為政者の個人的な道義・道徳は問われるところではない。」<sup>6</sup>

翻って、我が国の政治家、とりわけ国会議員たちは、無能無策な経済政策に終始して国民の経済生活を貧しくしているにもかかわらず、極めて高い議員報酬をはじめとする、自らの特権や既得権益を手放そうとしない。

恥という精神が芥子粒ほどでも残っているのならば、まずは自発的に、自身の身を切る歳出削減を期待したいものである。

はじめにでも述べた通り、道徳とはある種の不文律である事に、大きな特徴と意義があると言えるだろう。

法律に基づく懲罰への恐怖などではなく、自身の内発的動機付けに依る、立ち振る舞いこそが、真の意味での道徳である。

そのような意味で、英国紳士に求められた、ノブレス・オブリージュ (Noblesse oblige) の精神は、示唆に富む。

### 3. 社会と道徳

社会と道徳の関わりについて、想起されるのは、人々のモラル低下、人心の荒廃、公共精神の欠如、社会問題への無関心などの現象だろう。

上記は、特定の時代や地域固有の問題などではなく、古今東西において、広く見られた、文明社会における普遍的な現象であろう。

これら大きな視点、すなわち、国家や民族、時代や地域を超えた、社会と道徳の関わり全般について述べる代わりに、本章では、日本の近現代における社会と道徳の関わりについて論じていきたい。

真の自由には責任が伴う事を忘れ、果たすべき義務を軽んじ、自らの権利ばかりを主張する、戦後日本人を生み出した元凶は何か、という問いへの答えは、おそらく一つではないが、最大の問題は修身の欠如である。

とかく、軍国主義の先兵であるとの、あらぬ誹りを受ける修身ではあるが、その本質は、國體の護持に必要な不可欠な道徳心を養う事であった。

---

<sup>6</sup> 小室直樹 (2022年) 『新装版 日本いまだ近代国家に非<sup>あらず</sup>』ビジネス社, 101-102頁。

戦前の日本における、旧制小学校及び中学校の教科であった修身は、正式には「教育ニ関スル勅語」として、1890年（明治23年）に発表された教育勅語をその拠り所としていたが、それは道徳教育の根幹を成すものであった。

以下にその全文及び口語訳を示す

「朕<sup>おも</sup>惟<sup>い</sup>うに、我が皇祖皇宗<sup>はじ</sup>国を肇<sup>はじ</sup>むること宏遠に、徳<sup>た</sup>を樹<sup>た</sup>つこと深厚なり。我が臣民<sup>よ</sup>克<sup>く</sup>く忠<sup>ちゆう</sup>に克<sup>く</sup>く孝<sup>かう</sup>に、億兆<sup>いつせう</sup>心を一<sup>いつ</sup>にして世々<sup>よよ</sup>厥<sup>そ</sup>の美<sup>な</sup>を濟<sup>な</sup>せるは、此<sup>こ</sup>れ我が国体の精華<sup>ま</sup>にして、教育の淵源<sup>また</sup>亦<sup>また</sup>実<sup>こ</sup>に此<sup>こ</sup>に存<sup>ぞん</sup>ず。爾<sup>なんじ</sup>臣民<sup>しん</sup>父母<sup>ぼふ</sup>に孝<sup>かう</sup>に、兄弟<sup>けいてい</sup>に友<sup>ゆう</sup>に、夫婦<sup>ふうふ</sup>相<sup>あ</sup>和<sup>わ</sup>し、朋友<sup>おの</sup>相<sup>あ</sup>信<sup>しん</sup>じ、恭儉<sup>きうけん</sup>己<sup>おの</sup>れを持<sup>も</sup>し、博愛<sup>はくあい</sup>衆<sup>しゆ</sup>に及<sup>およ</sup>ぼし、学<sup>がく</sup>を修<sup>しゆ</sup>め、業<sup>ぎよう</sup>を習<sup>しゆ</sup>い、以<sup>もつ</sup>て智能<sup>しゆい</sup>を啓<sup>き</sup>発<sup>はつ</sup>し、徳器<sup>とくき</sup>を成<sup>せい</sup>就<sup>じゆ</sup>し、進<sup>しん</sup>で公益<sup>こうい</sup>を広<sup>ひろ</sup>め、世務<sup>せぶ</sup>を開<sup>ひら</sup>き、常<sup>じょう</sup>に国憲<sup>こくけん</sup>を重<sup>おも</sup>じ、国法<sup>こくぽう</sup>に遵<sup>したが</sup>い、一旦<sup>いつたん</sup>緩急<sup>くわんきつ</sup>あれば義勇<sup>ぎゆう</sup>公<sup>こう</sup>に奉<sup>ほう</sup>じ、以<sup>もつ</sup>て天壤<sup>てんじやう</sup>無窮<sup>むきゆう</sup>の皇運<sup>かううん</sup>を扶翼<sup>ふよく</sup>すべし。是<sup>かく</sup>の如<sup>ごと</sup>きは独<sup>ひとり</sup>り朕<sup>わが</sup>が忠良<sup>ちゆうりやう</sup>の臣民<sup>しん</sup>たるのみならず、又<sup>また</sup>以<sup>もつ</sup>て爾祖先<sup>なんぞん</sup>の遺風<sup>いふう</sup>を顕彰<sup>けんせう</sup>するに足らん。斯<sup>こ</sup>の道<sup>みち</sup>は実<sup>ま</sup>に我が皇祖皇宗<sup>わが</sup>の遺訓<sup>いしゆん</sup>にして、子孫<sup>しよん</sup>臣民<sup>しん</sup>の俱<sup>とも</sup>に遵守<sup>しゆんしゆ</sup>すべき所<sup>ところ</sup>、之<sup>これ</sup>を古今<sup>ここん</sup>に通<sup>とお</sup>じて謬<sup>まう</sup>らず、之<sup>これ</sup>を中外<sup>ちゆうがい</sup>に施<sup>せ</sup>して悖<sup>べい</sup>らず。朕<sup>わが</sup>爾<sup>なん</sup>臣民<sup>しん</sup>と俱<sup>とも</sup>に拳<sup>けん</sup>々<sup>けんけん</sup>服膺<sup>ふくよう</sup>して、咸<sup>みな</sup>其<sup>その</sup>徳<sup>とく</sup>を一<sup>いつ</sup>にせんことを庶<sup>こいねが</sup>幾<sup>げ</sup>う。

明治二十三年十月三十日 御名御璽」<sup>7</sup>

「天皇である私が思うところを述べてみよう。我が御先祖が日本の国を建てたのは遥か大昔のことである。それ以来、代々の御先祖が国民に深く厚い道徳を示してきた。それに対して我が国民は君に忠孝を尽くし、全ての国民が心一つにして、そのような美風をつくりあげてきた。これは我が国柄の輝かしい光であると同時に、教育の根本でもある。

国民よ、父母に孝行し、兄弟仲良くし、夫婦は仲睦まじく、友達同士お互いに信じ合い、自分は常に謙虚な心を持ち、世の人々に博愛の手を差し伸べ、学問を修め、職を手につけ、それによって知識と才能

<sup>7</sup> 矢作直樹解説(2020年)『〔復刻版〕初等科修身〔中・高学年版〕』ハート出版、6頁。

を養い、人格を磨き、進んで公共のために貢献して世の中に役立ち、常に憲法を尊重して法律を遵守し、国家の一大事には義勇の精神で一身を捧げなさい。それらを実践することで、永遠に続く皇室の盛運をお助けしなさい。

それは、ただ天皇に対して忠義ある善良な国民であることを示すだけでなく、国民の祖先が作り上げてきた伝統的美風を、さらに世に明らかにすることにもなるだろう。以上述べた教えは、我が御先祖の遺訓であり、子孫国民が共々に守り従わなければならないことである。この教えは昔も今も通じる間違いのないものであり、日本だけでなく外国で実行しても決して道理に反しない。私はこの教えをしっかりと心に刻み守っていくので、皆も一緒に実践することを切望して止まない。」<sup>8</sup>

儒教の影響も見られると指摘される教育勅語であるが、近代日本人の精神性形成に果たした役割は、無視できないだろう。

#### 4. 宗教と道徳

前章の日本の例で述べたように、直接的、間接的とを問わず、社会秩序を支える道徳規範の土台には、必ず宗教の存在を見出すことができた。

たとえば、日本人の精神性に多大なる影響を与えた武士道精神にも、神道と仏教が持つ哲学を見出す事ができる。

「運命に任すという平静なる感覚、不可避に対する静かなる服従、危険災禍に直面してのストイック的な沈着、生を賤しみ死を親しむ心、仏教は武士道に対してこれらを寄与した。」<sup>9</sup>

「仏教の与え得ざりしものを、神道が豊かに供給した。神道の教義によりて刻み込まれたる主君に対する忠誠、祖先に対する尊敬、ならば

---

<sup>8</sup> 矢作直樹解説(2020年)、前掲書、7頁。

<sup>9</sup> 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳(1938年)『武士道』岩波文庫、33頁。



に親に対する孝行は、他のいかなる宗教によっても教えられなかったほどのものであって、これによって武士の傲慢なる性格に服従性が賦与せられた。」<sup>10</sup>

日本における神道及び仏教，欧米におけるキリスト教，アラブ世界におけるイスラーム，さらにはヒンドゥー教やユダヤ教など，各時代，地域，国家，民族には，それら共同体の底流を成す信仰が見てとれ，個々の教義による差異を超えた，ある種の共通性と普遍性を見出すことができる。

もちろん，各宗教における教義の違いは，ある宗教と他の宗教とを隔てる，本質的な違いであり，個々の宗教の存立要件となっている事実を否定しようがないが，ここで述べる共通性及び普遍性とは，自らを超えた存在への畏怖と尊敬という，個々人が抱く感情そのものである。

天地の創造主，森羅万象に宿る精霊，万物を司る理など，各宗教によって，帰依する対象は異なっているが，人智を超えた至高なる存在という点において，共通している。

宗教が道徳的規範形成に果たす役割は，上記のような形而上学的側面のみならず，より具体的かつ，個々人の生活に根ざした，世俗的な倫理について規定する。

仏教における五戒やモーセの十戒では，人間が実践すべき道義が説かれているが，これらは宗教的帰依心に依る信仰のみならず，個人と社会を律する役割をも果たしている。

地域や民族などの垣根を超えた世界宗教が説く，2つの戒律を以下に示す。

「不殺生<sup>ふせつしょう</sup>（生き物を殺さないこと），不偷盜<sup>ふちゆうとう</sup>（盗みをしないこと），不邪淫<sup>ふじやいん</sup>（不倫などの<sup>よこしま</sup>邪なセックスの禁止），不妄語<sup>ふもうご</sup>（嘘や悪口を言わないこと），不飲酒<sup>ふおんじゆ</sup>（酒を飲まないこと）」<sup>11</sup>。

<sup>10</sup> 新渡戸稲造著・矢内原忠雄訳，前掲書，33-34頁。

<sup>11</sup> 松尾剛次（1999年）『仏教入門』岩波ジュニア新書，21頁。

「あなたには、わたしをおいてほかに神<sup>かみ</sup>があってはならない。あなたはいかなる像<sup>ぞう</sup>も造<sup>つく</sup>ってはならない。あなたの神<sup>かみ</sup>、主<sup>しゅ</sup>の名<sup>な</sup>をみだりに唱<sup>とな</sup>えてはならない。安息日<sup>あんそくび</sup>を守<sup>まも</sup>ってこれを聖別<sup>せいべつ</sup>せよ。あなたの父母<sup>ちちはは</sup>を敬<sup>うやま</sup>え。殺<sup>ころ</sup>してはならない。姦淫<sup>かんいん</sup>してはならない。盗<sup>ぬす</sup>んではならない。隣人<sup>りんじん</sup>に関して偽証<sup>ぎしやう</sup>してはならない。あなたの隣人<sup>りんじん</sup>の妻<sup>つま</sup>を欲<sup>ほつ</sup>してはならない。」<sup>12</sup>

偶像崇拜の禁止や安息日の聖別など、その宗教固有の規定もあるものの、それら以外は、世俗的な文脈においても、公序良俗に寄与するものだろう。

ここで特筆すべきことは、個々人の内発的動機付けに依拠しつつも、宗教には、道德規範を維持する、潜在的な圧力が備わっている点である。

宗教が果たしている最大の役割は、死への不安感や恐怖心を和らげることだと言っても、過言ではない。

人間の意識や精神は、脳の電氣的・化学的反応で全て説明がつく、などと嘯くような唯物論の信奉者にとって、死はただ恐怖でしかないだろう。

靈魂や死後の世界など信じぬ彼等にとっては、死とは全ての終わりであり、物質的肉体の滅びとともに、何もかもが消え去ってしまうのだから、虚無主義へと転落する他ないであろう。

人類にとっての最大の疑問であり、また難問でもある、死後の世界に関する問題提起は、勸善懲悪を説く上で、思わぬ副次効果をもたらした。

すなわち、地獄と極楽、あるいは天国などという、死後の世界の詳細な描写であり、人類の歴史において、文化や芸術など、数々の作品創造の源泉ともなってきた。

余程の物好きでもない限り、攻め苦や暗闇が支配する地獄よりも、極楽や天国への往生を、多くの人が願うであろうからだ。

死後の世界に関する伝統宗教が掲げる教義は、個々人の道德的規範形成に一定の役割を果たす一方で、宗教戦争に代表される、数多くの問題点がある事もまた、残念ながら事実である。

<sup>12</sup> 日本聖書協会発行（1987年）『新共同訳 旧約聖書 旧約聖書続編つき』日本聖書協会、申命記5章7-21節。

魂の永続性を信じる態度とは、要するに、死を恐れないことであり、これは、自身が報じる宗教共同体への強烈的な帰属意識とも相まって、異民族や異教徒との紛争を、より苛烈化させてしまう原因となっている。

そもそも、異なる宗教間はおろか、同じ宗教内部における宗派对立など、信仰にまつわる闘争は、古今東西、枚挙にいとまがなかった、

我々は、宗教戦争や宗派对立という現実には、いかに向き合うべきなのか、そして、何故、宗教戦争や宗派对立が起こるのかという疑問。

宗教戦争や宗派对立は、それぞれの教義そのものに内在している、独善性や排他性に起因していることは否定しようもないが、それらに加えて、ある種のセクショナリズムの性質を、持っていると言える。

人間は皆、自身が帰属し、所属する狭い範囲内での、正義や利得を追求したがる悪癖を持つ傾向があり、これらは宗教や宗派が抱える欠陥であるというよりは、人間自身の問題である。

「ノーベル物理学賞受賞者のスティーヴン・ワインバーグのような人々にとっては、精神性など無用のものである。ワインバーグは、宗教こそ諸悪の根源であると考えている。彼はわざわざ挑発するように述べる。「宗教があろうとなかろうと、良い人間は良い行いをし、悪い人間は悪い行いをする。しかし、良い人間に悪い行いをさせるのは、宗教だけである。科学の果たす大きな役割の一つは、頭の良い人間に信者であること不可能にさせないまでも、少なくとも信者でないことを可能にさせることだ」。そしてワインバーグは宗教がもたらした災いの例を挙げる。十字軍、ポグロム [ユダヤ人大虐殺]、ジハード [イスラム教徒の異教徒に対する聖戦]、その他の宗教戦争、そして奴隷制も。しかし彼は間違っていると私は思う。まず、彼が言及するのを忘れていたのは、誤って利用された科学が人類と生態系にもたらした災厄である。広島と長崎、地球温暖化、広がるオゾン・ホール、ナチスの医者による「研究」など、例には事欠かない。次に、彼が言う宗教（私なら精神性と言いたい）は、「本物の」宗教ではなく、その歪曲された形の一つである。

宗教戦争に加わった人たちは、あらゆる宗教の根底にある他者への共感に基づいて行動したはずがない。」<sup>13</sup>

このように、闘争や災禍の火種は、宗教の専売特許などではなく、宗教の対立概念として論じられることも多い、科学技術にも見られるものだ。

## 5. 道徳と普遍的価値

悪事を働かず、善を成せという戒めは、時代や地域、国家や民族、宗教などの違いを超え、ありとあらゆる社会に存在してきたであろうが、それらの間に横たわる差異は無視できない。

経済、政治、社会、宗教という、四つの分野における道徳的規範について、ここまで述べてきたが、未だ普遍的価値なるものについて、解き明かせないでいる事は、筆者として痛恨の極みである。

はたして、神でも佛でもない、我々人間ごとき存在に、普遍的価値など論じる資格があるのだろうか。

相対的な二元論対立以前に、時間的、空間的、概念的な拘束を受ける生身の人間には、真の意味での客観性など、持ち得ない現実がある。

それがあるとすれば、そして我々がそれを認知できる状況とは、啓示、天啓、神託、幻視、涅槃など、宗教的文脈に頼らざるを得ないであろう。

宗教的文脈とはつまるところ、個々人が経験すべき主観的体験に過ぎず、言語化するには自ずと限界があり、科学的実証も極めて困難である。

聖書に登場する幾多の預言者達が経験した、唯一絶対神やその御使いたる天使との遭遇、沙羅双樹の下で究極の覚りを得た仏陀の境地などが、代表的な事例であるが、物語の面白さはともかく、人間による理解可能範囲から逸脱していると、言わざるを得ない。

しかし、無謀な挑戦とは知りつつも、人間の言葉で語れる限界点に、可能な限り近づくことを目標に、本章を締めくりたい。

歴史や伝統の蓄積からなる道徳と、時空を超えた普遍的価値という、相

---

<sup>13</sup> マチウ・リカルル、チン・スアン・トゥアン著、菊地昌実訳（2003年）『掌の中の無限 チベット仏教と現代科学が出会う時』新評論、387-388頁。

対する二つの概念について、いかに整合性をとるべきなのか。

この回答不可能にも思える問いに対する、一筋の光明となりうるのが、長年、現代科学との対話を続けてきた、チベット仏教界の取り組みである。

「私たちは今、目印になるものを失って当惑しています。そういうときに現代科学と仏教の観想科学が歩みよるのは、当然のことです。仏教は教義の上に成り立つのではなく、内観的体験と現実の哲学的分析に基づいています。ですから仏教は、どんなタブーにも既成観念にもとらわれず、ひたすら真理の探求を目指して、つねに対話を受け入れる姿勢にあります。仏教は最初から現象世界の本質について問い続けてきました。なぜなら、私たちの事物の知覚の仕方と事物の真の性質との間に溝ができると、私たちの心には混乱が生じ、苦しみが現れるからです。仏教にとって、現象は「出来事」として現れるのであり、自立した内面的な実体をもっていません。」<sup>14</sup>。

仏教の特筆すべき特性は、神が世界を創造したのか否か、進化論は正しいのか否か、不死不滅の靈魂はあるのか否か、などというような、形而上学的な論争からは意図的に距離を置き、この世界の真のあり様を探求しつつも、我々人間が実践すべき生き方、すなわち、物心両面での豊かさについて、論じることができる点である。

釈迦、俗名「ガウタマ・シッダールタ」<sup>15</sup>は、靈魂や死後の世界の有無について、弟子から問われた際、沈黙を貫いたと言われているが、この態度はそれらについて、否定も肯定もしなかったという意味であり、ここに多くの解釈が生まれる余地を残した。

森羅万象には、それ自体のみで独立して存在できる、固有の実体は何一つないという教義だけに着目すれば、無神論的（特に上座部仏教）であるといえ、数多の如来や菩薩が織りなす、多神教的世界観（特に大乘仏教）を展開し、原初の佛に全てが還元されると主張する、唯一神教的な側面を

<sup>14</sup> マチウ・リカール、チン・スアン・トゥアン著、菊地昌実訳、前掲書、1頁。

<sup>15</sup> 松尾剛次（1999年）『仏教入門』岩波ジュニア新書、6頁。

持った宗派（特に密教）が存在するという多様性からも、他宗教や現代科学を受け入れる土壌があった。

「仏教は七世紀からインドで衰退し始め、十二世紀頃、この国から消えました。その後、アジアの多くの国々に引き継がれました。この移転の結果、チベットには、きわめて豊かなスコラ哲学的な伝統と観想の伝統が生まれたのです。チベットの文献はサンスクリットと中国の（古典的な）文献のあとに続くものとして、東洋で一番豊かなものです。注釈に加えて、仏教とヒンドゥー教との形而上的な論争も収められています。論じられているのは、とりわけ、創造主の存在ないし非存在、魂の不滅、プラトンの〈イデア〉に相当する一般的本質などです。こうした論争は、今日もなお僧院で続いていて、私たち二人がこれから話し合うはずの多くの問題について、仏教の立場をさらに明確にする役割を果たしているものと言えます。ただ、ここで何よりも強調しておきたいのは、こうしたどんな思索も、もし、苦しみの原因をその根本から絶つという強い意志に基づいた利他精神がなければ、死語にすぎないという事実です。」<sup>16</sup>

第4章でも述べた他者への共感、そしてそこから生じる利他精神は、真実を冷徹に追求する科学的姿勢と、十分に両立可能であることを、仏教の寛容性は示しており、両者は補完関係でさえある。

「仏教と科学の二つの現実観には確かな共鳴と一致があるということだ。現象世界にかんする仏教の記述の一部は、現代物理学、とりわけ量子力学（無限に小さなものの物理学）と相対性理論（無限に大きなものの物理学）という支柱をなす二大理論の根底にある考え方に驚くほど似ている。仏教と科学の、現実に対するそれぞれの取り組み方は、根本的に違っているとは言え、克服不可能な対立ではなく、逆に、

---

<sup>16</sup> マチウ・リカール、チン・スアン・トゥアン著、菊地昌実訳、前掲書、31頁。

調和的な相補性へと通じていた。しかも、その理由は、両者がともに真理の探求を目指し、真実性と厳密性と論理でその結果を判定するからである。」<sup>17</sup>。

社会の発展や科学技術の進歩を伴う、物質的豊かさと、他者を思いやる事ができる精神的豊かさ、両者は両輪の如く欠けてはならぬものであり、自らとは異なる思想や言論を封殺せず、真摯な対話を続ける開かれた姿勢を、道徳的規範の根幹に据える必要があるだろう。

## 結論

仏教が提唱する空性<sup>くうせい</sup>は、虚無主義とは似て非なるものであり、实在論と観念論という、両極端な二元論的対立を超越している。

空性の理は、相対的真理、すなわち、我々の日常生活に関わる社会的慣習や一般常識、さらには、人類が長い歴史の中で見出してきた、科学的発見に立脚する、数学や物理学上の諸法則などについて、何ら否定するものではないが、これらの約束事は、いわば方便としての役割を果たしている。

相対的真理に対する、絶対的真理とは、第4章でも触れた通り、それ単体でのみ存立しうる、固有の実体は何もないという真実である。

自我への執着（我執）を断ち切る事こそが、全ての苦しみの抜本的解決策であると考える仏教は、この真実を悟る事を、何よりも優先する。

真実に気づかぬ無知が、多くの苦しみと不幸をもたらしているという事例の最たる例が、中華人民共和国における、チベット人やウイグル人、南モンゴル人などに対する、ジェノサイド（民族浄化）であろう。

相対的真理（道徳）を包括した絶対的真理の観点からも、ロシア連邦軍によるウクライナ侵略とともに、許されざる絶対悪である。

---

<sup>17</sup> マチウ・リカール、チン・スアン・トゥアン著、菊地昌実訳、前掲書、382頁。

[参考文献]

サンライズ出版編 (2003年)『近江商人に学ぶ』サンライズ出版。

堤未果 (2021年)『デジタル・ファシズム 日本の資産と主権が消える』NHK出版新書。

堤未果(2022年)『ルポ 食が壊れる 私たちは何を食べさせられるのか?』文春新書。

ギュスターヴ・ル・ボン著, 櫻井成夫訳 (1993年)『群衆心理』講談社学術文庫。

サミュエル・スマイルズ著, 竹内均訳 (2002年)『自助論』三笠書房。

小室直樹 (2022年)『新装版 日本はまだ近代国家に<sup>あ</sup>らず』ビジネス社。

矢作直樹解説 (2020年)『[[復刻版] 初等科修身 [中・高学年版]]』ハート出版。

新渡戸稲造著, 矢内原忠雄訳 (1938年)『武士道』岩波文庫。

松尾剛次 (1999年)『仏教入門』岩波ジュニア新書。

日本聖書協会発行 (1987年)『新共同訳 旧約聖書 旧約聖書続編つき』日本聖書協会。

マチウ・リカール, チン・スアン・トゥアン著, 菊地昌実訳 (2003年)『掌の中の無限 チベット仏教と現代科学が会える時』新評論。